



和光大学図書館における視覚障害者サービス--だれもが使いやすい図書館づくりをめざして

著者	石谷 エリ子
雑誌名	図書館雑誌
巻	88
号	7
ページ	474-475
発行年	1994-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00001806/

和光大学図書館における 視覚障害者サービス

——だれもが使いやすい図書館づくりをめざして

石谷エリ子

はじめに

和光大学は開学以来、「開かれた大学」として障害をもつ学生にも広く門戸を開いている。視覚障害者についても1968年以来、毎年数名の学生が入学しており、現在4年生2名、3年生3名、2年生2名、1年生2名計9名の視覚障害学生が在籍している。

図書館での視覚障害学生に対するサービスの中心は対面朗読サービスだが、図書館の正式な業務としてスタートしたのは1972年である。当時は視覚障害学生を中心とした公共図書館での視覚者サービスを求める運動により、都立日比谷図書館で朗読サービスが開始された(1970年)こともあり学生と図書館との協議と試行期間を経て、現在実施している対面朗読サービスのスタイルの原形ができあがった。朗読室も当初は資料室の一隅から始まって、窓なし防音設備なしの朗読室の時代を経て、現在の新図書館の防音・空調設備の整った4室の朗読室を提供できるまでになった。

学生による朗読サービス

対面朗読サービスは「読む人」がいれば、すぐにでも始められる、きわめてフレキシブルな図書館サービスだが、当館のサービスの大きな特徴は一週間の時間割を年度当初に作り、利用者(視覚障害学生)と朗読者が一年間ペアを組んで実施する点である。

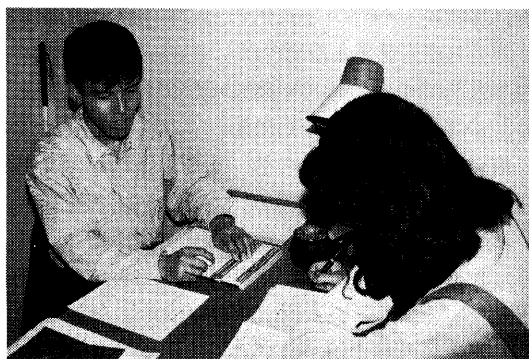
朗読者は4月に本学学生の中から希望者を募る。利用者と朗読者の双方の希望の時間(月曜3限と水曜2限というように)を聞き、担当者が調整する。利用者1名あたり週2～3コマの朗読時間が保障

されているので、20名以上の朗読者の確保が必要となり、時間割すべてが決定するのは例年5月連休明けとなる。

朗読者には「朗読のてびき」を配布し、特に読書のプライバシーの保護と無断欠席のないように注意をする。また当館では朗読室で渡された印刷物を読むだけでなく、図書館利用全般にわたる補助業務も朗読者の重要な役割と考えているので朗読者自身が日頃から図書館に親しみ、資料配置や検索方法について積極的にマスターしてくれるように話している。

そしてこれも業務が充足した当初からの重要なポイントだったが、朗読者には賃金として朗読料が支払われる(年2回支給。'93年度は計36,000円)。図書館業務の一部を委嘱し、自覚をもって仕事をしてもらうためである。

朗読者の構成としては、前年度から継続の学生+新入生+利用者の友人+ α といったところだが、初めての顔合わせでも、すぐに打ち解けて、朗読時間以外でも気軽に声をかけて交流している様子は、障害をもつ学生も健常の学生も肩を並べて学



▲利用者と朗読者はペアを組んで活動を共にする

ぶ本学らしい自然な光景である。今年は「和光大学で学んだのだから、対面朗読もぜひ経験して役に立ちたい」と申し出た4年生もいた(時間の都合がつかず残念ながらキャンセルとなったが…)。

図書館員による予約制サービス

時間割が決まればあとはスムーズに過ぎてゆくわけだが、時には無断欠席や遅刻の繰り返しに悩まされたり、利用者からは「朗読技術の向上」あるいはそれ以前の問題として「辞書が引けない」「調べ物に時間がかかる」などの声も寄せられたりする。そこで学生による時間割制の朗読サービスを補う形で1979年度から図書館職員による予約制の朗読サービスを始めた。原則として週1コマ程度、前日までに予約申し込みをしてもらい、職員はローテーションで朗読にあたる。申し込み数は多いとは言えないが、館員自身が実際に朗読室で朗読することのメリットは大きい。

もともと当館では館員が交替制でカウンターに出て貸出・返却のほか参考業務も行なっているので学生と接する機会には恵まれている(「うちの大学の図書館の人は優しくて親切」の声あり)が、ことに視覚障害学生にとっては、館員の専門的な知識や資料相談を受けるチャンスが増え、図書館利用の幅が広がる。また図書館にとってはサービスを見直す機会ともなる。

対面朗読サービスのほか、相互協力業務の一環として国会図書館録音サービスの申し込みを受け付けている。録音テープは直接利用者に郵送される。

パソコンを活用した点訳・検索

点訳図書の収集については、学生からはテキストの点訳や点字の蔵書目録の作成の要求が出されているが、前述のように利用者数も多く、専攻分野もさまざまな状況においては手がつかないでいる。点訳出版物の中から辞典類を中心に学生の要望も入れて購入している。しかし、外国語や専門書については販売されているものは皆無といってよく、有料点訳やボランティアの点訳作業に依るところが大きいようだ。個人の負担で作成された点訳テキストや録音テープが卒業後寄贈され、後

輩の勉学に役立っており、ありがたく思っている。

図書館が「図書」の館でなく、あらゆる形態の「情報」の集積基地へと姿を変えつつある現在、当館も例外ではなく、業務のコンピュータ処理化が進行中だが、視覚障害学生を取り巻く学習環境も一変しつつある。筆者が点字の手習いをしていた学生時代は木と鉄でできた点字盤を使って一点一点打っていくのが主流だったが、今やパソコンという優れモノの登場によって、フロッピーを持ち歩くだけでレポート書きやプリント類の点訳、辞書の検索などが可能になった。

ワープロの取り扱いすら赤ん坊程度の筆者にとっては理解を超えた世界だが、現在在籍している視覚障害学生のほとんどが自宅にパソコンを持ち、フルに活用しているようである。大学内でも学生の要望により点字ワープロ機能を持つパソコンを事務部局で購入し、今年4月に完成した図書館の増築部分に対面朗読室とは別に「点字パソコン室」を設け公開しているが、利用のない日はないほど盛況である。

データ通信を利用して必要な情報を得、それをさらに点訳ソフトを使って点字化したり、電子ブックのような全く別の形の出版物を利用したり、新しい読書環境へと移行しつつある。より簡単によりスピーディに、そして願わくはより安価に利用できる日を待ちたい。

利用者の声とともに

「だれもが利用しやすく、また働きやすい」図書館づくりをめざして歩んできた和光大学の図書館。10年前に新築した建物自体にもその精神は生きている。段差のない床、エントランスとトイレの自動ドア、点字付きの館内触知図、ローカウンター、広い書架間隔、など。エレベーターは業務用にも重宝している。視覚障害学生へのサービスは、対面朗読サービスを核としつつ、カウンターでのきめ細かなレファレンスで補いながら、そして利用者の声に耳を傾けながら、今後も進んでいくことと思う。

(いしたに えりこ：和光大学附属梅根記念図書館)

[NDC：015.17 BSH：1.図書館奉仕(障害者サービス)]

2. 和光大学附属梅根記念図書館]